

Title	言語文化学 Vol.18 学会の活動/会則/執筆要項
Author(s)	
Citation	大阪大学言語文化学. 18 p.231-p.241
Issue Date	2009-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77837
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

学会の活動

平成 20 年 6 月 28 日 大阪大学言語文化学会第 33 回大会

<研究発表>

- 金 想容：現代台湾のメディア市場における「御宅族」、「宅男」の一考察
—混成された「オタク像」の過剰消費—
- 陳 麗華：植民地教育を受けた台湾「日本語人」における日本への視点
—日本語による会報誌『友愛』の分析をもとに—
- 林 盈萱：台湾における日本へ留学する大学院生の自律性を高める会話教育
—アクションリサーチを通じて—
- 郭 毓芳：日本語漢字語彙の意味形成の一考察
—台湾人日本語学習者を対象に—
- 張 巧蟻：中国系留学生間の会話における日本語コードスイッチング
—言語表現の補足としての機能を中心に—
- 藤井久美子：カナダ・バンクーバーにおける中国系コミュニティの言語使用に
関する一考察 —アンケート調査と文献資料の分析から—
- Shchepetunina Marina：農耕の起源およびその営みを語る日本神話における女神
および男神のイメージ
- 上田 恭寿：日本語虚構テキストにおける重なりと移動
- 井上加寿子：マンガのオノマトペ表現にみる造語のパターン：
認知言語学的観点から
- 玉木 晋太：‘It is adjective of DP to VP’ 構文の統語構造
- 西口 純代：Possessive Relation Disambiguation of Japanese Genitive Marker No
- 三木 望：コーパス駆動的アプローチによる議論文の語彙的特徴分析

<総会>

活動報告

委員改選

新委員：

岩根久（委員長）、北村卓（前年度委員長）、小門典夫（学会誌担当）、佐藤彰（秋の大会運営担当）、成田一（春の大会運営担当）、福田覚（書記）、早瀬尚子（学会誌担当） 三宅真紀（事務局）、藤浦五月、田鴻儒、谷智子、濱上桂菜、山本恵子
会計報告（次々頁のとおり）

平成 20 年 10 月 30 日 大阪大学言語文化学会第 34 回大会

(大阪大学言語社会学会・言語文化学会合同研究発表会)

<研究発表>

- 松本 ユキ：『アンナとシャム王』『王様と私』『アンナと王様』における近代化
と女性化、人種・ジェンダーの統合
- リュウ ロ：『アルヨことば』の発展と特徴、及び中国語訳に対する考察
- 王 天保：逆接接続助詞「ノニ」、「クセニ」に関する一考察
—「ニ」から分析する可能性をさぐる—
- 全 敏紀：日本語と韓国語の複合動詞の対照研究
—「交換」、「修正」を表す複合動詞の意味と統語構造を中心に—
- 周 艶紅：中国語の語気助詞“呢（NE）”の概念化
- 丁紀祥（言社）：FLASH を利用したマルチメディア教材製作の実践報告
—日本語単語ゲーム教材を例に—
- 山本 一晴（言社）：多言語・多文化共生社会における言語内翻訳の有用性と処
理方略
- 依岡 宏子：「東京モスク」と「大日本回教協会」
- 張 修慎：雑誌『民俗台湾』における台湾知識人の「共栄圏文化」
- 滝本 理博（言社）：「鳳子」から見る沈從文の世界観について
- 上田 恭寿：日本語引用テキスト再考 —2つの間接引用テキスト—
- アヌシュリー（言社）：堀田善衛が辿ったフォスターの『インドへの道』
- 久保 公人（言社）：ヘミングウェイ文学における暴力とライティング
—「ホーム・ライク」な場所をめぐる議論を中心に—
- 後藤 篤（言社）：都市の「細部」へ—Vladimir Nabokov の“A Guide to Berlin”—

平成 21 年 3 月 31 日『言語文化学 第 18 号』発行

<査読者>

伊勢芳夫、井元秀剛、岩居弘樹、岩根 久、上田 功、植田晃次、大谷晋也、
大村敬一、大森文子、岡田伸夫、沖田知子、越智正男、金子元臣、木内良行、
木原善彦、木村茂雄、郡 史郎、小門典夫、小杉 世、斉藤 渉、坂内千里、
佐藤 彰、里内克巳、杉本孝司、瀧田恵巳、津田保夫、中 直一、成田 一、
難波康治、西口光一、西村謙一、春木仁孝、日野信行、深澤一幸、水野博子、
三藤 博、三牧陽子、宮本陽一、村岡貴子、山下 仁、山田雄三、由本陽子、
ヨコタ村上孝之、義永美央子、我田広之、渡部眞一郎、渡邊伸治、渡辺秀樹

《平成 19 年度 大阪大学言語文化学会 会計報告》

(単位：円)

収 入		支 出	
予備費（前年度繰越金）	2,000,163	『言語文化学』第 16 号印刷代	480,050
学会費・賛助金	870,000	『言語文化学』第 16 号発送費	49,770
『言語文化学』売上	2,000	郵送費	28,580
利息	2,489	大会補助運営費	23,412
送料差額	50	大会受付謝礼	22,500
		消耗品費	17,029
		抜き刷り郵送費差額	435
		予備費（次年度繰越金）	2,252,926
計	2,804,702	計	2,874,702

(平成 20 年 3 月 31 日現在)

平成 19 年度会計担当委員 三宅 真紀

会計監査（平成 20 年 5 月 15 日） 山下 仁

歳岡 冨香

大阪大学言語文化学会会則

第1条 本会は大阪大学言語文化学会と称する。

第2条 本会の会員は次の2種とする。

1. 通常会員 大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻の教員、大学院学生、大学院修了者（言語文化専攻の修了者も含む）で所定の会費を納めたもの。
2. 特別会員 元教員及び本会にとくに貢献したもの。

第3条 本会は会員の学術研究を促進するとともに、研究成果の普及をはかり、広く学術全般の進展に寄与することを目的とする。

第4条 本会は前条の目的を達成するために研究会を開催し、機関誌を発行する。

第5条 本会の会員は機関誌の配布を受ける。

第6条 本会は第3条の目的を達成するために年1回、言語文化学会総会を開催する。

第7条 本会に次の役員をおく。

1. 会長及び委員、監事をおく。
2. 会長を言語文化専攻長、副会長を副専攻長とする。
3. 委員は原則として教員より8名、大学院学生より5名を選出する。
なお、別に事務担当をおくことができる。
4. 監事は2名とし、会計の監査にあたる。監事は会長が委嘱する。

第8条 本会に委員会をおく。

1. 委員は前条3の委員をもって構成する。
2. 委員会に委員の互選による委員長、企画・編集委員（若干名）、会計委員（若干名）をおく。
3. 委員会は本会の運営にあたる。

第9条 役員の任期は次の通りとする。

1. 会長及び副会長の任期は言語文化専攻長及び言語文化副専攻長の任期に従う。
2. 委員の任期は1年とする。
3. 監事の任期は1年とする。

第10条 本会の経費は会員の会費及びその他の収入による。

1. 会費は付則の定めるところによる。
2. 本会の会計年度は4月より翌年3月までとする。

第 11 条 本会の事務局は大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻内におく。

- 付則
1. 通常会員は会費として年間 3000 円を納める。
 2. この会則の改正は、総会において出席者の 3 分の 2 以上の賛同を必要とする。
 3. 本会則は平成 3 年 5 月 8 日より発効する。

平成 19 年 10 月 25 日改定

『大阪大学言語文化学』執筆要項

1. 「論文」または「研究ノート」について

原稿はワープロ等の活字印刷のものを3部提出する（2部は表紙を付けずにホッチキス留め、1部は表紙を付けそれを含めてホッチキス留めして提出）。用紙はA4サイズで横書き。本文は和文または欧文に限る。和文原稿の場合は40字×30行（本文・脚注とも11ポイント）、欧文原稿の場合は30行（本文・脚注とも12ポイント）の書式を用いること。引用文のポイント数を落とすことはできない。提出原稿の形式は以下の通り。

- (1) 1枚目：表紙
- (2) 2枚目：論文要旨 (A)（日本語）
- (3) 3枚目：論文要旨 (B)（日本語以外の言語。日本語で本文を執筆した場合のみ、提出。）
- (4) 4枚目以降：本文

ページ番号は、4枚目を1ページにして、本文だけに付ける。それぞれの執筆上の注意は、以下の通り。

(1) 表紙：

表紙ページに以下のように記入すること（[]内は説明）。

論文の題名 [本文と同じ言語] * [半角アスタリスクを1つ付ける]

[1行あける]

執筆者氏名 [本文と同じ言語] ** [半角アスタリスクを2つ付ける]

[1行あける]

キーワード3語 [本文と同じ言語]

[3行あける]

* [半角アスタリスク1つと、半角スペース] 論文の題名 [本文と異なる言語]（執筆者氏名）[丸かっこをつける。本文と異なる言語で。非ローマ字言語の場合は、ローマ字表記も付記する]

[1行あける]

** [半角アスタリスク2つと、半角スペース] 執筆者の所属 [日本語で書く]

・タイトルとサブタイトルのつなぎ方、スペース、大文字と小文字の区別等は、以下の例にあわせること（論文名等は『言語文化学』Vol.12 から引用）。

— 論文題名の書き方 —

（日本語、中国語などの場合）

フランス語化政策とマイノリティー

— ケベック州移民統合政策の縮図としての中国系移民 —

（英語の場合）

An Unweeded Garden That Grows to Rhyme:

The Relationship between William Shenstone's Gardening and His Poetics

〔英語の場合は、タイトル、サブタイトルの最初と最後の語の先頭を必ず大文字にする。それ以外の語も、冠詞、前置詞、等位接続詞、不定詞の to を除いて、大文字で始める。〕（それ以外の言語は、それぞれの慣例に従うこと）

— 氏名の書き方 —

（日本語例）言文 太郎

（朝鮮語例）겐분 다로 (GENBUN Taro), 김민호 (KIM Minho)

〔朝鮮名・中国名の場合は、姓名を分かち書きしないこと。〕

（中国語例）胡 琳 (HU Lin) [ローマ字表記は日本語読み (KO Rin) 等でも可。]

（英語例 1）GENBUN Tarou [姓（全大文字）＋名前（先頭だけ大文字）]

（英語例 2）Tarou GENBUN [名前（先頭だけ大文字）＋姓（全大文字）]

（ロシア語例）ИВАНОВА Мария (IVANOVA Mariya) [ローマ字表記も付けること。]

— 所属の書き方（必ず日本語で） —

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程（学生の場合）

大阪大学言語文化研究科（常勤教員の場合）

大阪大学非常勤講師（非常勤講師の場合） など

— キーワードの書き方 —

（日本語例）キーワード：ホテル、都市メディア、消費文化

（英語例）Keywords: *ut pictura poesis*, the garden-poetic relationship, Thomas Percy's ballads

(2) 論文要旨 (A)

日本語で1,000字以内。冒頭に「論文要旨(A)」と書き、日本語で論文の題名を付ける。執筆者氏名は書かない。

(3) 論文要旨 (B)

本文を日本語で執筆した場合のみ、提出が必要。

日本語以外の言語で書く。欧文の場合は400ワード以内。中国語、朝鮮語の場合は1,000字以内。冒頭に「論文要旨(B)」と書き、要旨(B)と同じ言語で論文の題名を付ける。執筆者氏名は書かない。

(4) 本文

(a) 原稿の長さ、字数

「論文」和文ではA4用紙13枚以内、欧文ではA4用紙18枚以内（図表・参考文献・注など全てを含んだ枚数）。図表・参考文献・注など全てを含んだ完成原稿を提出すること。本文の字数は和文で12,000字以内、欧文で5,000ワード以内とする。執筆者は原稿提出の際、所定の書式によって字数を申告する。

「研究ノート」和文ではA4用紙10枚以内、欧文ではA4用紙15枚以内（図表・参考文献・注など全てを含んだ枚数）。図表・参考文献・注など全てを含んだ完成原稿を提出すること。本文の字数は和文で9,000字以内、欧文で4,000ワード以内とする。執筆者は原稿提出の際、所定の書式によって字数を申告する。

(b) 冒頭に本文と同じ言語で論文の題名を付ける。執筆者氏名は書かない。

(c) 章・節番号

「0」ではなく「1」から始めること。漢数字表記は認めない。

— 章・節番号の書き方 —

1（半角スペース）セクション題名（「1.」「1章」「I」などとしな

1.1（半角スペース）サブセクション題名（ピリオドのあとにも半角スペース。「1.1」「1.1.」とはしない）

1.1.1（半角スペース）サブサブセクション題名（ピリオドのあとにも半角スペース。「1.1.1」「1.1.1.」とはしない）

(d) 和文中の句読点「。」と「、」を用いる。

(e) 数字表記

横書きであることを考え、原則としてアラビア数字を用いる。アラビア数字は半角で入力する。

(f) 特殊文字、文字修飾

文字装飾は、原則的に和文は太字と下線、欧文は太字と下線とイタリック体のみとする。また①、②などの特定のワープロにしか出せない記号は、使用しないこと。

(g) 例文番号

例文の先頭に (1)、(2)、(3) などの丸かっこ付きの番号を用いる。下位区分には、a、b、c. を用いる。

— 例 —

(1) 東京に行った。

(2) a. *田中さんに行った。

b. 田中さんのところに行った。

(h) 図表

図表には番号と図表名を付ける。

(i) 参考文献・引用文献の表記

参考文献の一覧は本文の後につける。下記の例を参考にすること。

— 日本語文献例 —

著者名『著書名』発行元、発行年。

著者名「論文名」『掲載誌名』巻号数、発行元（発行団体）、発行年、pp.1-16。

外国語文献の場合は、それぞれの言語の慣例に従うこと。

(j) 注

注は通し番号をつけて頁末脚注とする。注のフォントサイズは、本文と同じとする。本文中の注番号としては、「これは例文です¹⁾。」のような上付き文字を用いる。

(k) 謝辞

査読に不都合があるので、応募時には謝辞を書かない。採用決定後は短い謝辞を記載してもよい。

2. 「書評」および「図書紹介」について

どちらも和文で A4 用紙 4 枚以内 (4,000 字以内に)、欧文で A4 用紙 7 枚以内 (1,800 ワード以内に)。「図書紹介」は、当該年度出版または出版予定で、筆者自身が執筆または編集に携わった図書の紹介記事とする。「書評」は、それ以外の図書を対象とする。

原稿は、ワープロ等の活字印刷のものを 1 部提出する (ホッチキスで留める)。用紙は A4 サイズで、横書きとする。和文原稿の場合は、11 ポイントで 40 字 × 30 行、欧文の原稿の場合、12 ポイントで 30 行とする。それ以外の規則は論文、研究ノートに準じる。提出原稿の形式は以下の通り。

1 枚目：書評者名、書評の対象となる本の書名、著者、出版社、(出版地、) 出版年度、ISBN。

2 枚目以降：本文

3. 原稿ファイル提出について

掲載が決定した論文原稿については、原稿ファイルをメールで genbunjl@lang.osaka-u.ac.jp 宛てに添付して提出すること。あるいは、CD-ROM 一枚に記録して提出してもよい。原稿ファイルは、Word (.doc), .rtf で読める形式のものにすること。

4. その他

＜原稿の種類変更＞ 一度提出された原稿の種類 (論文、研究ノート) は、原則として変更できない。

＜ネイティヴチェック＞ 本文、論文要旨とも、母語以外で書かれた部分については、かならずネイティヴ・チェックを受けてから提出すること。文章力が著しく劣る場合は内容の如何にかかわらず不採用となることがある。

＜第三者のチェック＞ 一定の水準で査読が行われるために、執筆者は事前に読み合わせを行うなど、投稿前に第三者に目を通してもらうことが望ましい。

＜盗 用 ・ 剽 窃＞ 引用箇所については、出典をはっきりと示すこと。査読段階で盗用・剽窃が指摘された場合、不採用とする場合がある。

その他執筆に関して不明な点があれば、大阪大学言語文化学会事務局 (genbunjl@lang.osaka-u.ac.jp) まで問い合わせること。